



平成の百工比照 展示・閲覧コーナー

巻頭言

金沢美術工芸大学が新校舎に移転して約1年半が過ぎた。新校舎移転に伴い、美術工芸研究所内に置かれていた研究費やFD活動に関わる教育研究センターが独立した組織となり、美術工芸研究所は美術、工芸及びデザインに関する調査研究、芸術資料の収集と管理、教育に特化する組織として生まれ変わった。柳宗理記念デザイン研究所、アートベース石引の運用に加え、新たに完成したアートギャラリーの展示会開催と運用がその役割として加わった。また、約8,000点を超える収蔵品、卒業制作の買上げ作品のすべての確認調査を始めるなど、令和6年度の美術工芸研究所は大変忙しい1年となった。ここではその1年を振り返ってみたい。

本学の美術工芸研究所は、金沢の地域文化の発展と工芸技術の継承を目的として、「平成の百工比照収集事業」を推進し、ものづくりの素材と技術、工程を学ぶ教育の充実に取り組んでいる。本年度、国立民族学博物館との連携を深め、高等教育映像シリーズ「平成の百工比照 コレクションの保存と活用」を完成させた。この映像は、HPやYouTubeなどを通じて広く公開され、教育教材としての活用が期待されている。

アートギャラリーでは、ポスター、写真、彫刻、絵画、工芸と幅広いジャンルの展示を年間5本企画し、収蔵品の活用と市民への公開に努めた。特に、「KANABIの百工比照（金工編）」では、百工比照資料と収蔵品を併せた展示を実施し、市民に広く公開した。さらに、「一刻^{たがね} 鑿 体験ワークショップ」

を通じて、実際の道具を使用しながら、制作の奥深さを体感する機会を提供した。これにより、来場者は単なる鑑賞にとどまらず、ものづくりの本質に触れることができた。

また、本学と金沢市が共同で推進する百工比照展示・閲覧コーナーでは、約6,300点の資料が閲覧可能となり、制作工程を高精細の4K映像で記録した技術資料の視聴や、タッチパネル式の資料検索ができる環境を整備した。本年度は3,489人が来場し、貴重な工芸資料に触れる機会を提供した。

さらに、アートベース石引では、彫刻専攻学生による「祈りをたばねて」展をはじめ、日本画、油画、工芸、ホリスティックデザイン専攻の学生による展示会が15件開催された。これらの展示を通じて、学外への情報発信を強化し、学生の作品を広く市民に公開する機会を創出した。柳宗理記念デザイン研究所には令和7年2月28日時点で13,057人の来場者があり、デザイン分野における研究と発信の場として機能している。

本学図書館と美術館の連携も進めており、アートギャラリーの展示会内容に合わせた図書資料の展示を実施している。これにより、作品鑑賞と関連資料の閲覧を一体化し、より深い理解を促す取り組みを行っている。

今後も、美術工芸研究所は美術工芸研究と教育の発展を目指し、地域文化の継承と創造の拠点としての役割を果たしていきたいと考える。

アートギャラリー展覧会

金沢美術工芸大学は、1946年の開学以来、教育と研究に活用する資料として、また優れた芸術を鑑賞する機会を市民に提供するために、世界的に著名な芸術家の作品を含む約8,000点の芸術資料を収集してきた。2023年10月1日の新キャンパスへの移転以降は本学の学生はもとより、市民の皆様をはじめ学外の方々も訪れる「アートギャラリー」（美術館・図書館棟1階）を開設し、絵画、彫刻、工芸、デザイン、その他の分野にわたる芸術資料を「コレクション展」や「特別展」で随時公開している。2024年度は、4つのコレクション展と1つの特別展を開催した。

■コレクション展1

テーマは「写真」。自然環境や生物を被写体とした20世紀アメリカ「自然写真」の代表的な写真家であるイモージン・カニンハム、エドワード・ウェストン、アンセル・アダムス、エリオット・ポーターの作品、および、現代日本の写真家として、都市と自然の関わりを探求する原直久、グロテスクなモチーフやテクスチャーが印象的な今道子の作品を展示した。

〔展示作品〕

エドワード・ウェストン《Two Shells, 1927》ほか2点、イモージン・カニンハム《Agave Design1, 1920s》ほか2点、アンセル・アダムス《Yosemite Special Edition Print : 10. Dogwood Blossoms, 1938》ほか16点、エリオット・ポーター《Spruce Woods, Fish Hawk Point, Great Spruce Head Island, Maine 1934 (Portfolio : There is my own spirit, 1990)》ほか9点、原直久《8-532 1974 Sep.3 2:51 Les Halles Centrales, Paris, France, 1974》ほか4点、今道子《向日葵+潤目鰯, 1990》ほか2点

会期：2024年4月1日(月)～5月31日(金)

入場者数：601名

主催：金沢美術工芸大学 美術工芸研究所



会場内展示風景

■コレクション展2

テーマは「版画・ポスター」。戦後日本のグラフィックデザインのパイオニアである亀倉雄策、デザイン雑誌『アイデア』の初代アートディレクターで本学教員をつとめた大智浩のポスターや著作、スペインの宮廷画家をつとめたフランシス・デ・ゴヤの版画、フランスの版画家アブラハム・ボスの版画や技法書、ポップアートの旗手と称されるアンディ・ウォーホルの作品などを展示した。

〔展示作品〕

版画＝『ビュイック木版画作品集』トマス・ビュイック』再版1970年(初版18世紀末～19世紀初頭)、《ロス・カプリチオス(気まぐれ) フランシスコ・デ・ゴヤ》1799年、《『酸と硬軟のワニスによる銅凹版画技法』 アブラハム・ボス》第1版1645年・第2版・1701年・第3版1745年・第4版1758年／1773年か、《凹版木の刷り師たち アブラハム・ボス》1642年、《五感(聴覚、視覚、嗅覚、味覚、触覚) アブラハム・ボス》1638年頃、《MAO Wallpaper アンディ・ウォーホル》1974年／ポスター＝《東京オリンピックポスター(日の丸) 亀倉雄策》1990年(復刻版)、《東京オリンピックポスター 陸上 亀倉雄策・村越襄(フォトディレクション)・早崎治(写真)》1990年(復刻版)、《Hiroshima Appeals 亀倉雄策・横山明(イラストレーション)》1983年、《クリエーション掲載作家近作展 亀倉雄策》1994年、《オリベッティ「計算機の宣言」 ジョバンニ・ピントーリ》1994年(復刻版)、《「こどもたちを守ろう!」 ヨゼフ・ミュラー＝ブロックマン》1994年(復刻版)、《IBM ポール・ランド》1994年(復刻版)／大智浩の著書・訳本『デザイン感覚』『デザインの色彩計画』『ポスターデザイン』他

会期：2024年6月3日(月)～8月2日(金)

入場者数：1,025名

主催：金沢美術工芸大学 美術工芸研究所



大智浩 ポスター原画



会場内展示風景



会場内展示風景

■コレクション展3

テーマは「金属工芸とKANABIの百工比照」。江戸時代に加賀藩の御用をつとめた白銀師・水野源六家の刀装具類、西洋におけるジャポニスム（日本趣味）の流行に呼応して輸出用に制作された明治時代の金工品、「平成の百工比照」の金工分野の資料を多数展示した。百工とは様々な工芸、比照とは比較対照するという意味。本学は日本全国に息づく工芸の材料・道具・工程見本、及び製品を収集している。また、会期中の8月10日(土)に金属に鑿を打つ「一刻 鑿体験ワークショップ」を開催した。

〔展示作品〕

水野源六家の江戸と明治＝《刀装具雛形箆筒 水野源六》江戸(18-19世紀)、《刀装具と煙管(菊花文様鐺・獅子文様鐺・秋草鈴虫文様縁・松枝文様縁・天狗文様目貫・琵琶文様目貫・宝珠文様煙管) 水野源六》江戸(18-19世紀)、梅樹に尾長鳥図花瓶・双鶴図香炉 水野源六》明治(19世紀)、《鷹置物 山川孝次・水野源六》明治(19世紀)／ジャポニスムと明治金工＝《葡萄栗鼠図洋灯 鈴木長吉》明治(19世紀)、《京都風景図香箆筒 駒井》明治(19世紀)、《蝶文様花器 桐山直太郎》明治(19世紀)、《大根に鼠置物 山田宗美》明治(19-20世紀)、《加賀象嵌工程見本・菊双鶴図花瓶 白山忠次》昭和(20世紀)／参考出品＝《作刀工程見本 大野義光》平成(20世紀)、《象嵌臙銀花器「窓」 中川衛》平成24年(2012)／《平成の百工比照》金工分野の道具・製品・工程見本

会期：2024年8月5日(月)～8月30日(金)

入場者数：462名

主催：金沢美術工芸大学 美術工芸研究所



水野家資料《雛形木製見本箆筒》江戸時代



体験ワークショップの様子

■特別展

「九谷の陶芸家・北出塔次郎が収集した陶磁器」

北出塔次郎(1898～1968)は、大阪美術学校で矢野喬村に南画を学んだ後、1921年(大正10)に九谷焼の北出家に婿養子に入り作陶を志し、陶芸家の板谷波山、富本憲吉に師事した。1941年(昭和16)の第4回新文展で特選を受賞し、戦後は日展への出品を続け、日展評議員となり、1968年(同43)に日本芸術院賞を受賞した。また、1946年(同21)に金沢美術工芸専門学校(現在の金沢美術工芸大学)の講師、1949年(同24)より教授として教育・研究に多大な功績を残した。この特別展では、研究のために収集し本学へ寄贈された「北出コレクション」のうち古九谷をはじめとする日本陶磁の優品を展示した。

〔展示作品〕

古九谷と再興九谷＝《色絵岩に鳥図深鉢 古九谷》江戸(17世紀)、《色絵葉蘭図平鉢 古九谷》江戸(17世紀)、《色絵波に蝶図平鉢 古九谷》江戸(17世紀)、《色絵芭蕉幾何文角鉢 吉田屋窯》江戸(19世紀)、《色絵桔梗文八角鉢 吉田屋窯》江戸(19世紀)、《色絵老子出関図大德利 吉田屋窯》江戸(19世紀)、《色絵牡丹文酒沸かし 若杉窯》江戸(19世紀)、《赤絵鳳凰牡丹唐草文德利 若杉窯》江戸(19世紀)、《赤絵牡丹文鉢 春日山窯》江戸(19世紀)、《色絵梅文蓋物 粟生屋窯》江戸(19世紀)、《色絵竹に虎図平鉢 松山窯》江戸(19世紀)、《色絵甕割童子図大皿 正院窯》江戸(19世紀)、《赤絵菊慈童図香炉 小野窯》江戸(19世紀)、《染付山水図大鉢 永楽和全》明治(19世紀)／日本陶磁の優品＝《大壺 常滑焼》室町-桃山(15-16世紀)、《大壺 伊賀焼》桃山-江戸(16-17世紀)、《大壺 信楽焼》室町-桃山(15-16世紀)、《茶碗 志野》桃山(16-17世紀)、《茶碗 萩焼》江戸(17世紀)、《水指 小杉焼》江戸(19世紀)、《德利 越中瀬戸焼》江戸(18-19世紀)、《鉢 三田焼》江戸(19世紀)、《水瓶・椀 薩摩焼》江戸(18-19世紀)、《德利 高取焼》江戸(18-19世紀)／富本憲吉と北出塔次郎＝《色絵四弁花丸紋散陶篋 富本憲吉》昭和11年(1936)、《色絵芦の図陶円板 富本憲吉》昭和13年(1938)、《色絵四弁花文飾壺 富本憲吉》昭和12年(1937)、《色絵四弁花文蓋物 富本憲吉》昭和16年(1941)、《色絵蓮池図飾皿 北出塔次郎》昭和27年(1952)

会期：2024年9月2日(月)～11月29日(金)

入場者数：2,194名

主催：いしかわ秋の芸術祭実行委員会、石川県、一般財団法人石川県芸術文化協会、金沢美術工芸大学 美術工芸研究所

後援：金沢市、北國新聞社



会場内展示風景

■コレクション展4

テーマは「卒業・修了制作の優品」。本学では開学以来、卒業・修了制作の買上制度のもと1,200点を超える優秀作品を収集してきた。これらの作品は、個々の作り手たちの大学生生活の集大成であると同時に、本学の美術・工芸・デザイン教育の歴史とその成果を物語る重要な財産となっている。今回は副題を「昭和から令和まで、それぞれの時代」とし、その時代を反映したテーマや表現方法から創り出された作品を展示した。また、併せて特定非営利活動法人京都文化協会とキャンノン株式会社の社会貢献活動「綴プロジェクト」によって制作・寄贈された「俵屋宗達《扇面散図屏風》高精細複製品」を特別に展示した。

〔展示作品〕

《TVアニマル 中村肇》昭和52年度(1977)学部・商業デザイン、《腕 亀井岳》平成12年度(2000)博士後期課程・彫刻、《Field 角南友繁》平成22年度(2010)修士課程・油画、《a girl 桶谷紫乃》平成25年度(2013)修士課程・油画、《友禅奴 木本百合子》令和2年度(2020)学部・工芸(染織)、《溶雪 菜園 翁欣羽》令和3年度(2021)博士後期課程・工芸(金工)、《微風 笹井南海》令和4年度(2022)学部・彫刻、《T山TV放送 當山絢香》令和5年度(2023)学部・油画、《俵屋宗達《扇面散図屏風》高精細複製品》

会期：2024年12月2日(月)～2025年3月1日(土)

入場者数：878名

主催：金沢美術工芸大学 美術工芸研究所

平成の百工比照 展示・閲覧コーナーについて

2023年10月に新キャンパスで開設した平成の百工比照展示・閲覧コーナーは、資料を納めた箱が分類ごとに棚に並べられ、より手に取りやすく、資料を閲覧しやすい環境が整っている。旧キャンパス時代にくらべ、資料閲覧を目的に来館した方が数時間かけて熟観する姿を見かけるようになった。

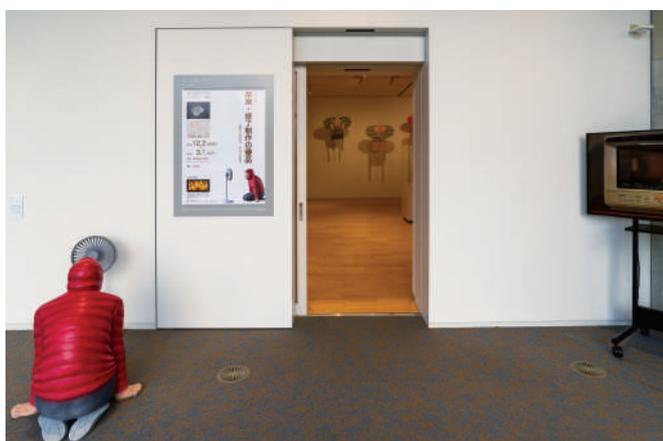
授業活用としては、工芸科の学生が教員の説明を聞きながら、多数並べられた資料に触れ、素材や技法について学び、また工芸教育法Ⅱの授業では、百工比照資料をもちいて模擬授業を考えるなど教育的活用もされている。

一方で新キャンパス移転後、ふらりと立ち寄り一般の来館者が増えたが「平成の百工比照」という言葉自体に馴染みがなく、さらには窓側の通路からは百工比照コーナーの中が見えないこともあり、閲覧コーナーに立ち寄っていただけなのが現状であった。

そこで、本学独自の優れたコレクションをひとりでも多くの方に興味をもってもらおう仕掛けとして、半円状の外壁に収集資料の壁面展示を実施した。展示方法はシンプルに既存の壁面金具を利用し、パンチングメタルの穴にネジとナットで固定したことで、展示替えもしやすいのが特徴である。また耐震を考慮し箱の両側にはズレ防止のネジを取り付けた。展示資料の注意点としては、窓に面しているため直射日光を受けても問題のない分野の資料を展示することとした。壁面展示は予想以上に効果があり、立ち止まって展示を見ていく方や、展示が気になり本施設に入ってくる方が増えた。

今後はさらにもう一步踏み込んだ鑑賞を誘発するために、箱のかぶせ蓋に箱内の状態写真を貼付し“写真を見ることにより、箱の中を見たい”となるような仕掛けづくりをすることで、よりコレクションの普及に努めていきたい。

(門田枝美子／美術工芸研究所 美術館事務)



会場内展示風景



依屋宗達《扇面散図屏風》高精細複製品



平成の百工比照 展示・閲覧コーナー外観

平成の百工比照（令和5年度収集資料 陶磁）

令和5年度の平成の百工比照の陶磁分野では、佐賀県有田焼の伝統的な色絵技術（釉上彩）を用いて描画彩色した磁器板の資料収集を行なった。

有田で磁器の生産が始まった17世紀初頭以来、白く美しい磁器肌を特色として多くのものが制作されてきたが、明治期以前から継続的に用いられてきている伝統のある技術や意匠を現代でも継承している窯元に制作を依頼する事とした。また素地が器物の場合、その形状の影響から、各窯元の色絵の特徴が比較しづらくなる可能性がある事を踏まえ、規格を揃えた磁器板に描いてもらうこととした。なお、窯元の選定や資料収集すべき技術に関する助言を佐賀県立九州陶磁文化館の鈴木由紀夫館長からいただいた。この場をお借りして深く感謝申し上げたい。

制作に使用される土や絵の具などの原材料は全ての窯元が独自のものを使用しているため、磁器板の制作から素焼き、本焼き、色絵付け、錦窯に至るまで日頃の制作と変わらない材料と手順を踏んで制作を行なってもらった。素地に使用されている磁土はすべて九州の天草陶土であるが、成形時の扱い方や焼き上がりの色の違いなどで様々な種類がある。それぞれの窯元の素地や釉薬の色や質感と、色絵との関係も見ていただきたい。

以下に収集した資料の概略を記す。

①今泉今右衛門窯「色鍋島有職文陶額」

成形、素焼き後に柞灰釉をかけ、赤松を燃料とした薪窯で本焼成した磁器板に色絵を施したものである。有職文は平安時代から高貴な身分を表す文様として用いられてきたものである。

②柿右衛門窯「錦 花鳥文様 陶板」

ガス窯による本焼成後に色絵を施したもので、柿右衛門窯の特徴となる赤を活かした伝統文様が施されている。

③源右衛門窯「古伊万里風 菊牡丹絵」

素焼き後に呉須による下絵付けを施した上で本焼成し、さらに色絵付けを施したものである。古伊万里の伝統文様を施したものである。

④香蘭社「宇治川」

素焼き後にルリゴスと言われる呉須による下絵付け後に施釉し本焼成、さらに色絵付けを施しているが、金を化学的に処理して作られる金液が部分的に使用されている。明治期の図案をもとに制作されている。

⑤深川製磁「つる朝顔」

素焼き後に呉須と下絵顔料を使った線描き・つけ濃み技法で下絵を施し本焼成し、さらに金液と洋絵の具により色絵を施したもので、明治期の図案をもとに制作されている。

⑥深川製磁「富士山」

呉須および下絵顔料をエアログラフにより下絵付け、施釉し本焼成したもので、色絵は施していない。

⑦今泉今右衛門窯「色絵薄墨墨はじき雪文陶板」

今泉今右衛門氏には江戸期から鍋島で使用されてきた「墨はじき」技法を独自の世界観を持って昇華させた作品「色絵薄墨墨はじき雪文陶板」を制作して頂いた。

素焼き後に墨で文様を描き、その上に呉須を施すと墨に含まれる膠成分が呉須をはじき、再度素焼きをすることで墨を塗った部分が白抜きとなる。その後施釉し本焼成、さらにプラチナ彩を含んだ色絵を施したものである。

（山本 健史／工芸科 陶造形）



①



②



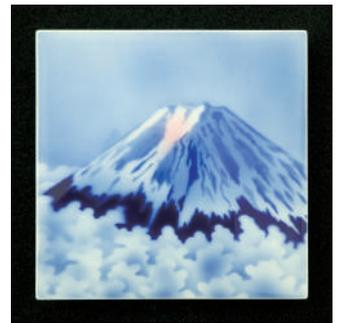
③



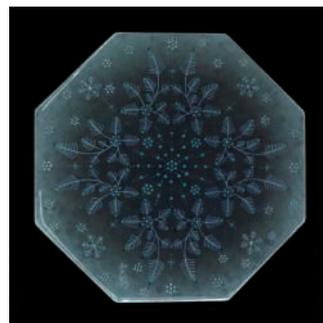
④



⑤



⑥



⑦

収集資料

平成の百工比照（令和5年度収集資料 漆工）

漆芸における「変わり塗り」は、江戸時代に刀の鞘へ独創的な塗装を施す「鞘塗（さやめり）」として発展し、彩漆（いろうるし）や蒔絵・青貝塗・象嵌（ぞうがん）など、さまざまな技法と組み合わせることで数百種類もの多彩な表現を生み出してきた。このように、漆の強い接着力や研ぎ出しによる質感を活かす技法の総称が「変わり塗り」であり、それは日本の漆文化が持つ実験性や革新性を象徴している。

歴史的に見ても、漆芸は重厚な和の伝統にとどまらず、新しい表現を追求する姿勢を絶えず持ち続けてきた。変わり塗りがそれほど多様化した背景には、職人たちの創意工夫と技術の試行錯誤が大きく寄与している。したがって、変わり塗りは過去の遺産として残すだけでなく、現代にも生きる「創造性の源泉」として再評価・継承していくことが極めて重要である。それは、次世代の漆芸家やデザイナーにとっては、新たなアイデアを得るための大きなヒントになりうるからである。

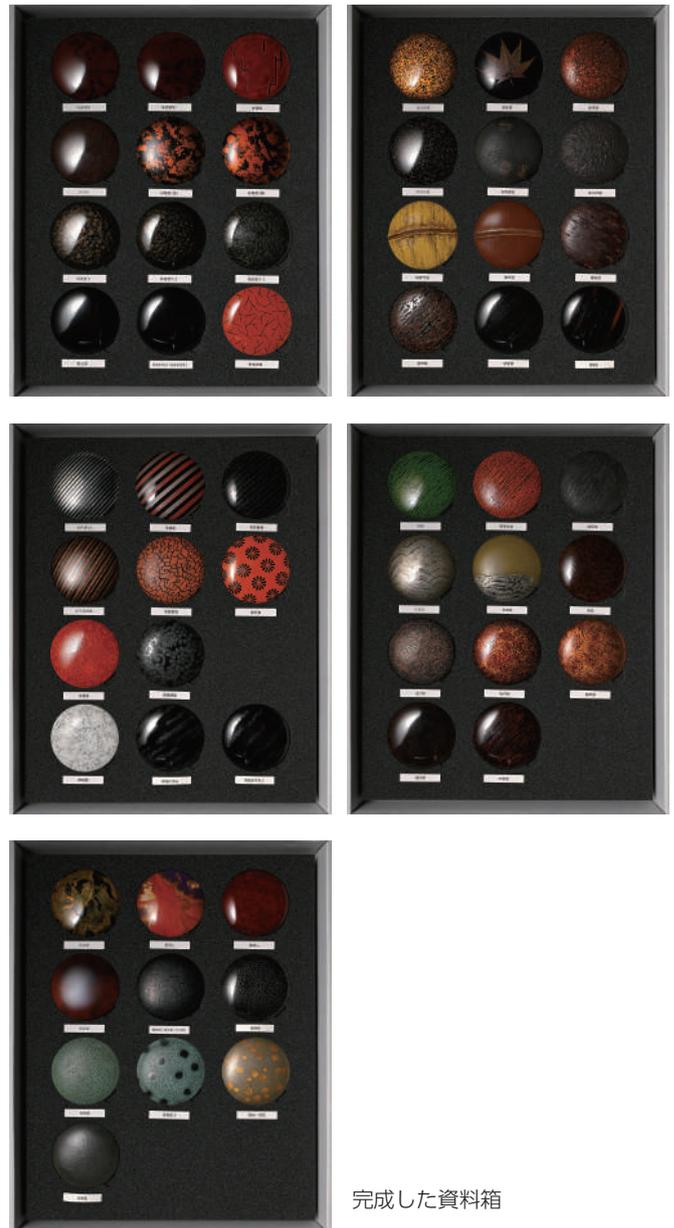
こうした意義を踏まえ、今年度の「漆の百工比照」事業では、変わり塗りの手板を制作した。これは、さまざまな技法や表現手法が一望できる形でまとめることで、塗り技法の伝統とその多様性を分かりやすく示すと同時に、未来へ受け継ぐための資料として活用する狙いがある。今回制作した手板の一覧には、江戸時代に蓄積された豊富なバリエーションをはじめ、現在も各地で行われる変塗技法が数多く含まれ、文化庁所蔵「高野松山制作による変り塗り見本手板」や石川県工業試験場 輪島指導室などに伝えられた資料を参考に制作した。

その一部として「牡丹塗」「磯草塗」「革紋」「菊打抜」「吸上塗」「金貝研出し」など、江戸期から伝わる伝統的な変り塗りを中心に、錆漆（さびうるし）を用いたもの、型紙による技法、植物の種・実・葉を活かしたもの、卵殻や貝殻を使用するものなど、多岐にわたる技法が含まれている。たとえば、代表的な津軽塗に近い表現が見られる「錆津軽」や、「絞漆（しぼうるし）」を巧みに用いたものなど、各名称からもその多様な技法の奥深さをうかがい知ることができる。

このように制作した「変わり塗りの手板」は、漆芸の歴史を物語る資料であると同時に、新しいアイデアを生み出すための「文化のレシピブック」としても機能している。今後は、国内外の研究者やクリエイターへの情報発信・教育に活用することで、漆文化のさらなる発展と魅力の再発見を促していく事が可能となる。伝統を学び、そこに革新の種を宿らせることで、変わり塗りが築いてきた創造性のバトンを未来へと繋ぐ意義は、今後も高まっていくことと感じている。

今回制作した変わり塗り手板の枚数は53枚、制作に携わった人は金沢在住の漆芸家および金沢美術工芸大学博士課程の学生など計17人になる。

（山村 慎哉／学長）



完成した資料箱

平成の百工比照（令和5年度収集資料 染織）

令和5年度、染織は弓浜絣を収集してきた。弓浜絣は、鳥取県西部の弓ヶ浜地方で生産されているが、現在は数軒しか生産されておらず、中でも江戸時代に栽培が始まった「伯州綿」を手で紡ぎ、手括り工程を経て、天然藍を建てて糸染めを行う、そして高機の手投杼で絣模様を織り出す手仕事による絣は貴重なものである。

現在この工程作業を分業含め、全て行っている反物の製作に携わっている方は、4、5名ほどしかおらず、伯州綿の畑を持ち栽培し、すくもの天然藍を自ら建て、糸を紡ぎ、絣括りを行い、手機で織る全ての工程を一人で行っている方は、さらに少ない。その中の一人が「絣音工房」の中村さゆり氏である。さゆり氏はかつての私の教え子であり、大学卒業後に地元の弓浜絣の第一人者であった故嶋田悦子先生に弟子入り、研鑽を積み独立をする。さゆり氏の夫も弓浜絣の職人であり、「中村括り」という工房を立ち上げ、夫婦で弓浜絣の制作に励んでいる。今回の弓浜絣の工程見本制作及び材料、道具等の提供には、さゆり氏だけでなく、夫の武志氏も快く協力してくださった。提供された工程資料は、①綿花、②繰り綿、③種、④紡錘状の糸、⑤車カセ、⑥型紙、⑦絵図台に張った種糸、⑧染め前の緯括り総糸、⑨染め後の緯括り総糸、⑩糸割り済み糸、⑪小管巻糸、⑫経糸40/2総の白、⑬経糸40/2総の紺、⑭製織布の計14点、その他にいくつかの弓浜絣の古布も入手している。

弓浜絣は1975年に国の伝統的工芸品に指定されている。弾力のある伯州綿を手紡ぎした糸は膨らみがあり、手仕事でしか生まれぬ風合いを持ち、保温性に優れた織布となる。意匠の特色は、鶴亀や松竹梅などの吉祥紋様や、動物、幾何柄、草花や風景など、限りなく豊かな柄バリエーションがある。代々織り継がれてきた弓浜絣は、人の想いとそれぞれの時代が感じられる庶民の為の織物である。

工程見本の制作依頼と調査を兼ねて、鳥取の弓ヶ浜地方に出向き、様々な弓浜絣を見るときにも伯州綿の栽培されている弓ヶ浜半島を訪ね、米子市山陰歴史館の学芸員さんなどから伯州綿栽培の歴史資料や文化的資料なども拝見させていただいた。弓ヶ浜が綿栽培に向いているのは水捌けの良い砂地であり、砂地は太陽の照り返しにより綿花が綿に変わる時も乾燥を促してくれる。そして、水やりのための綿井戸も多く掘ることのできる土地であったからである。山陰地方は、広瀬絣、倉吉絣など絣を織る技術が発達しており、かつては絣の名産地として名を馳せていた。そのうちの広瀬絣の工房である天野紺屋にも足を運んだ。また古布の収集については、さゆり氏より山陰の絣蒐集家である村穂久美雄氏をご紹介いただき、おびただしい数の絣織木綿布を見せていただいた。その中から数点の弓浜絣を選び、平成の百工比照コレクションに加えさせていただいている。

産業としては厳しい状況である弓浜絣ではあるが、製作を

続けていただく為にもまずは一人でも多く弓浜絣の魅力を知っていただくことであり、そのきっかけとなれば幸いである。

（大高 亨／工芸科 染織）



「絣音工房」の様子



完成した資料箱

平成の百工比照（令和5年度収集 金工）

令和5年度の収集事業において金工分野では有線七宝の工程見本の作成及び収集を行なった。七宝技法は金属を胎とする金胎七宝、陶磁器を胎とする陶磁胎七宝などが挙げられるが、主に七宝というと金胎七宝を表すことが一般的であり、加飾技法の一つとして発展してきた分野である。金胎七宝の中にも有線七宝、無線七宝、透胎七宝、省胎七宝など様々な技法が存在するが、最も代表的な手法が有線七宝であり、絵画的な平面表現から器物等の立体物の加飾として幅広く用いられてきた技法である。これまでの収集実績もなく、金工分野においても必要不可欠な技法であるという判断から今回の収集を決定した。有線七宝において特定の産地にて完成品を現物で収集することは難しいため、工程見本の制作を個人に依頼することとした。また事業の趣旨に合致した高い技術水準の工程見本を収集するにあたり、技法における高い知識と技術、描写力を有していることが重要であり、この点を踏まえた上で、七宝作家の前田恭兵氏に制作を依頼した。

前田恭兵氏は東京藝術大学で七宝技法を習得し、主に有線七宝を基盤とした研究を深め、継続して研究発表を行なっている。これまで伝統として継承されてきた技法を基盤としながら、より緻密な植線を施した描写表現を高い技術力で実現している。現在は日本七宝協会に席を置き、山梨県立宝石美術専門学校にて教員として後進の育成に携わりながら、実制作を通して七宝の発展に尽くしている。釉薬の生成から焼成、研ぎ上げまで全ての工程における知識と技術を網羅している人物である。

今回の制作では①下絵、②下地釉・下書き、③植線、④銀線固定、⑤1番差し、⑥1番焼き、⑦2番焼き、⑧3番焼き、⑨荒砥ぎ、⑩仕上げと10工程で制作を行った。特筆すべき点は、③植線及び④の銀線固定（専用の糊を用いた仮留めの状態）、⑤の1番挿し（焼成前の粉末状の釉薬を施釉した状態）の非常に不安定な状態の工程を含めている点である。

元来、今回のような見本での収蔵には強度的に耐えられないものであるが、銀線を植線した状態や焼成前と焼成後の釉薬の表情の違いを明瞭にあらわす事は、詳細な参考資料を作る上で必要不可欠であると考え、工程に加えている。具体的な方法として、特殊な樹脂で固定するなどの処理を施すことで、実際の表情を損なう事なく収蔵に耐えられる強度を保持させている。また植線を多く施すことで有線七宝の特徴と魅力を反映させた図案としている。混釉するなど色幅を持たせることで彩色を豊かにし、複雑で繊細な描写まで表現している。収蔵品としての価値は大きく、また今後の専門実技指導等における参考資料としての活用が大いに期待されるものである。

（水代 達史／工芸科 彫金）



完成した資料箱

平成の百工比照 高等教育映像の制作について

本学では「平成の百工比照」を題材に、国立民族学博物館（大阪府吹田市／以下「みんぱく」）と協力して、令和3年度から高等教育に資する映像の制作事業を進めてきた。令和6年度に映像制作が全て完了したことから、映像制作事業の経緯や内容について簡単に報告しておくことにしたい。「平成の百工比照」そのものを知りたい向きは、本学HPなどを適宜参照されたい。



シリーズタイトルとテロップのグラフィック・デザイン、令和3年度制作の映像から

【事業の概要と経緯】

今般の映像制作は、みんぱくと本学の連携協力事業協定に基づいて実施された。みんぱくの力添えにより「平成の百工比照コレクション・データベース」が整備され、令和2年度に本学の百工比照ギャラリー内で運用が始まった。このデータベースの継続的な保守を行うとともに、平成の百工比照を材料に高等教育で活用できる教材を作成する事業としてスタートしたのが、2者間の連携協定である。高等教育としての切り口となったのが博物館学で、みんぱくというパートナーと博物館学芸員課程を設けている本学による事業としては、ある意味ではこの成り行きは必然だったといえる。筆者は学芸員課程担当教員、博物館学の専門家として3編の映像の構成に携わった。

当初予定では、令和3～5年度の3カ年で3編の映像を制作することになっていた。ところが、令和6年1月1日に発生した能登半島地震により映像制作チームのメンバーが被災したことから、みんぱくのご理解を得て令和6年度に編集作業を持ち越している。こうした曲折を経て令和6年12月に3編目の映像が完成した。現在、本学ホームページ内、百工比照を管理している美術工芸研究所のページで全3篇を公開している。

【映像の概要】

令和3年度は「平成の百工比照 金沢が進める日本の工芸技術継承プロジェクトの背景」と題する映像を制作した。文部科学省令の定める博物館に関する科目のうち、博物館経営論の観点から、百工比照を題材に金沢市の文化政策と当該事業の経緯、博学連携などといったテーマについての映像とした。シリーズ最初の映像となることから、江戸時代の百工比照の写真を用いて平成の百工比照の由来の説明にも努めた。

令和4年度は、博物館資料論と博物館情報・メディア論を切り口とする「平成の百工比照 文化資源としての意義とデータベースが開く可能性」と題する映像とした。重要文化

財に指定されている江戸時代の百工比照と対比させて「平成の百工比照」を「文化資源」に位置づけ、博物館に関連する諸制度や学術的概念をわかりやすく学ぶことができる映像にすることを心掛けた。

令和5～6年度は、「平成の百工比照 「ユニバーシティ・ミュージアム」としての平成の百工比照コレクション・ギャラリー」と題する映像とした。新キャンパス2号館1階に設置された新ギャラリーは、かねて推奨されていた大学博物館の整備に應えるものである。そのため、百工比照コレクションを改めて大学が保有する貴重な「学術標本」として捉え直したうえで、2号館1階中央に配置された開放的な新しいギャラリーを、とりわけ博物館資料保存論の観点から紹介する映像とした。

【映像制作について】

「高等教育シリーズ 平成の百工比照」は3編の映像として完結した。映像制作は、加賀市を拠点として活動する実力派の制作チーム「映像ワークショップ」に依頼した。「和様のBGMと明朝体のテロップ」のような「いかにも」な演出を回避して、現代に息づく工芸のコレクションを新鮮な気持ちで見ることができ、それでいて自然に学びが得られるような映像にすべく制作を進めた。様々な映像やアーカイブのプロジェクトの経験が豊富で技術力も高いチームが手掛けた結果、オレンジを基調とするフレッシュな色彩設計や現代的なBGMと効果音が心地よい、テンポの良い映像に仕上げることができた（写真を参照）。

映像制作の過程では、大学内外の関係者から様々なご協力を賜った。学外では主に石川県立美術館、福井県立歴史博物館、金沢市立安江金箔工芸館、公益財団法人前田育徳会、公益財団法人アイヌ民族文化財団、加藤謙一氏、横江昌人氏らの各機関・個人の皆様に出演・資料提供・撮影場所の提供などを頂戴した。学内では工芸科と芸術学専攻の教員および工芸科・芸術学専攻の学生の皆さんに、出演と専門分野に関するご助言をいただくことができた。また国立民族学博物館の日高慎吾教授には、事業のパートナーとして映像のコンセプトと予算措置で寛大なご理解をいただいた。シリーズの完結にあたり、ご協力・ご尽力くださった各関係機関の皆様にも金沢美術工芸大学を代表して記して心よりの御礼を申し上げます。

（渋谷 拓／一般教育等・博物館学）

柳宗理記念デザイン研究所

コロナ禍以前の賑わいもどりがあり、今年度は年間で述べ18,748人、月平均約1,600人の来場が本研究所にあった。感染拡大防止対策は任意により継続するとした上で各事業を展開した。今後も状況に応じて適切な対策のもと、展示活動ならびに教育普及の機会の拡大に努めたい。

また、今後本学の80周年に向けて、整備中の金沢美大柳宗理記念デザインミュージアム（仮称）と連携し、企画展等の実施を検討して行く予定である。

1. 調査

(1) 経常的調査

柳宗理の執筆、言及論文と発表歴に関する資料およびデータの整理を継続した。

(2) 柳宗理記念デザイン研究所活動実績2014-2024

2014年から2024年の10年間にわたる研究所の活動を講演会や企画展の詳細、展示品リストなどを中心に、管理・運営委員会の浅野隆が報告書としてまとめた。

2. 展示

(1) 常設展示（展示資料室1）

柳宗理がデザインした製品のうち現在も販売されているものを中心に約200点を常設展示している。実際の製品を展示・公開し、さらには各メーカーの製品が一堂に会している点において、来場者の好評を得ている。

(2) 企画展示（展示資料室2）

今年度は、金沢美術工芸大学が新キャンパスに移転し、展示スペースであるアート commons が充実したため、学生による展示は行われなかった。

3. 教育普及

(1) 大学との連携

【本学新入生ガイダンス】

・デザイン科インダストリアルデザイン専攻の新入生ガイダンスと展示資料室の見学を実施。学生たちが選んだお気に入りの一点について、プレゼンテーションを実施。また、柳宗理エッセイについてレポートを作成し学びを深めた。

日程・参加人数：4/18(木)・学生22名、教員2名

・芸術学専攻の新入生ガイダンスと展示室の見学を実施。

日程・参加人数：4/18(木)・学生5名、教員1名

(2) 金沢市との連携

【金沢工芸子ども塾見学】

・金沢工芸子ども塾の塾生たちが、デザインパートの導入で柳宗理記念デザイン研究所を見学。気に入った作品を実際に手に触れてスケッチを行い、最後に全員で発表を行った。

日程・参加人数：4/20(土)・子ども20名、講師1名、スタッフ2名

(3) 団体見学

その他、他大学学生による見学などもあった。



新入生ガイダンス



新入生展示資料室見学



金沢工芸子ども塾 観察スケッチ

(根来 貴成/柳宗理記念デザイン研究所 所長)

令和6年度収集美術資料一覧

■ 寄附資料	■ 制作年	■ 作者名等	■ 分類	■ 寸法・素材
栃空造食籠	2020年	中嶋 虎男	漆芸	21.4cm(直径) 9cm(高さ) 栃の横木材
栃空造盛器	2019年	中嶋 虎男	漆芸	40cm(直径) 6cm(高さ) 栃の横木材

■ 学生買上作品

KANABIクリエイティブ賞2024 学長賞 21名 (21件)

令和6年度修復実績

・「My Favorite things」 池上 奨

令和6年度所蔵作品活用実績

【貸与件数】

学内利用（貸与・特別利用含） 12件（42点）

・学外利用（貸与） 4件（13点）

・学外特別利用件数（画像利用等） 5件（225点）

・学外卒業買上作品利用（貸与・特別利用含） 7件（7点）

・市内各所貸与（年度更新） 23か所（57点）

※令和7年2月末集計

※本学主催の企画展等への出品および本学寄託資料の活用を除く

【平成の百工比照展示・閲覧コーナー】

・開室時間 月～金曜日：10時～17時

・休室日 土曜日、日曜日、祝祭日、夏季・春季休業期間、
年末年始、入学試験期間など

・入場料 無料

・開室日数 239日

・入場者数 3,489名

※令和7年3月1日時点

※特別展「九谷の陶芸家・北出塔次郎が収集した陶磁器」に併せて土曜日を開館

俵屋宗達「扇面散図屏風」高精細複製品活用実績

・授業利用2件

・コレクション展4「卒業・修了制作の優品」にて展示57日間

【アートギャラリー開室状況】

・開室時間 月～金曜日：10時～17時

・休室日 土曜日、日曜日、祝祭日、夏季・春季休業期間、
年末年始、入学試験期間、展示替え期間など

・入場料 無料

・開室日数 239日

・入場者数 5,160名

※令和7年3月1日時点

※特別展「九谷の陶芸家・北出塔次郎が収集した陶磁器」では土曜日を開館

研究所運営会議

／安島 諭（美術工芸研究所長、インダストリアルデザイン）、山崎 剛（美術工芸研究所（兼）芸術学）、村松 綾（美術工芸研究所（兼）芸術学）、渋谷 拓（一般教育等）、根来貴成（柳宗理記念デザイン研究所長、インダストリアルデザイン）

美術工芸研究所

／所長：安島 諭（（兼）インダストリアルデザイン）、山崎 剛（（兼）芸術学）、村松 綾（（兼）芸術学）、門田枝美子（美術館事務）、秋山 恵（美術館事務）

柳宗理記念デザイン研究所

／所長：根来貴成（インダストリアルデザイン）